

農業労働力調達のための親密圏と公共圏 — 経済発展にともなう再編成 —

**Intimate and Public Spheres for Getting Agricultural Labor:
Reframing with Economic Development**

一條洋子（京都大学大学院農学研究科 博士後期課程）

【ねらいと目的】

一般的に農業生産活動は「家族」を核に展開されるが、農繁期などの労働力の不足時には世帯間での労働交換という協力的行為も採られてきた。それは「親族・血縁関係者」を中心に「地縁関係者」まで拡大した範囲において複雑かつ柔軟に編成される。しかし労働交換は経済発展にともない衰退し、賃金雇用にとって代わられる傾向にある。言い換えれば農業生産のための労働力調達は「家族内→血縁・地縁関係者間→(市場)」という、親密圏内から公共圏内での調達という一連の流れをたどるものとしてとらえられる。一方、たとえば労働交換の衰退した日本農村では、過疎化や新規就農者の参入等から、かつてのユイの形態や精神が見直されつつある。上記の労働力調達圏の変化の後に、また新たな意味合いと境界を持つ「新・親密圏」における人々の協力関係が生まれつつあるといえる。

本研究では、農村におけるこうした親密圏と公共圏の再編成過程を、「労働交換」を軸にとらえ、社会経済環境の変化のなかで人々にその再編を促した要因、再編のあり様、またそれがもたらす社会経済的結果について、特に経済発展との関係に注目して研究する。

上記目的の下、まず経済発展の各段階を象徴する位置にあるアフリカ、東南アジア、日本の3地域における労働交換に関して、文献・資料・情報収集を行う。その上で、経済発展の中期ステージに位置する東南アジア農村における労働交換をめぐる現状を把握し、研究代表者がこれまで研究してきたアフリカにおける事例、および日本の事例の先行研究を参考にしながら検討を加える。

【活動の記録】

2008年8月21・22日

外部図書館にて文献・資料収集（於：東京）

各国「労働交換」に関する文献・資料およびカンボジア関連資料の収集

10月25・26日

「GCOE キックオフ国際シンポジウム」参加

11月7日

農学研究科生物資源経済学専攻国際農村発展論分野演習において調査前報告「アフリカとアジアにおける労働交換：カンボジア調査にむけて」

11月10日

「GCOE 第一回フィールド班会合」参加

12月6日

調査前勉強会「カンボジア農業および現地調査について」

指導：阪南大学矢倉研二郎准教授（於：大阪）

12月16日～31日 カンボジア現地調査

「農業労働力調達の現状と労働交換慣行に関する基礎調査」 タケオ州の2村にて実施、
現地協力者2名、農村コーディネータ3名、調査助手4名

16日 カンボジア現地調査へ向け出国（プノンペン）

17日 現地協力者打合わせ

18日 アシスタント打合わせ、質問票説明会

19日 調査対象地(タケオ州)へ移動、農村協力者打合せおよび聴き取り

20～25日 農村調査、プノンペン戻り

26日 調査票見直し作業

27日 収集統計資料翻訳作業

28・29日 日調査票見直し作業およびフォローアップ

30日 カンボジア出国

31日 帰国

2009年1月11・12日

「次世代グローバルワークショップ」参加

1月30日～2月2日

外部図書館にて文献・資料収集（於：東京）

各国「労働交換」に関する文献・資料およびカンボジア関連資料の収集

2月3～20日

調査票データ入力（依頼）

2月18日

「第二回全体研究会」参加、参加報告書提出

【成果の概要】

アフリカ・日本・東南アジア農村における労働交換に関する文献・資料を収集しつつ、東南アジアにおける労働交換の実態調査としてカンボジアにて現地調査を実施した。中でも有数の稲作地帯であるタケオ州の2つの農村を事例村として選定し、4人の調査助手とともに、それぞれ37世帯と40世帯に対し聴き取りによる家計調査を行った。また米収穫の最盛期に訪問させていただき、収穫および脱穀作業をも見学することができた。

結果、調査地は都市にも比較的近く現金経済も浸透しているが、世帯外からの農業労働力の調達は未だ血縁・地縁関係に基づく労働交換によって行われるのが主流であった。この状況は所有土地面積の格差の小ささ、米という作付作物の単一性、自給的農業、村内の農外労働機会の少なさといった現地の特徴によるものと考察された。また労働交換慣行に関する意識調査の結果からは、労働交換への参加依頼を断ることに對して寛容さが見られる一方で、自らは積極的に参加するという姿勢が強調された。この点は研究代表者が労働交換の衰退していくタンザニア農村で行った同類の意識調査と逆の傾向を示すものであり、両地の社会経済的背景の相違に起因するものと推察される。さらに調査村では出稼ぎ

で村を離れる家族を持つ世帯の労働力不足を補いあうという労働交換の役割も見出され、この点は日本の昔と重なるものであった。結論として、調査村では通常血縁者を中心とした親密圏から労働力を確保し、その外円にある極めて近い公共圏に属する地縁関係者を含めた圏内すなわち（準）公の場において労働交換を行うことで一時的な労働力不足を補いあい、他方で機会が得られればさらに広い公共圏である都市へと家族労働力を振りむけ現金収入を経て生計を立てていると解釈された。また労働力調達形態が労働交換から賃金雇用へと変化した後も、調達圏は大きく変わらず、ただしその分化がより明確になる可能性が示唆された。

本調査研究によりこれまで研究のなされていなかったカンボジアにおける労働交換について、現状の一つを把握し基礎的考察を行うことができた。



労働交換 Pravah Die（プラヴァッ・ダイ）での収穫作業。
時に冗談を言い合いながら、時にただ黙々と、稲を刈り取っていく。



調査票を用いた聴き取り中のアシスタント2人。
調査初期の頃は尋ね方などを確認しあいながら実施していった。